

あなたを癒やす

第531回

医心伝身

ふーん、ナルホド

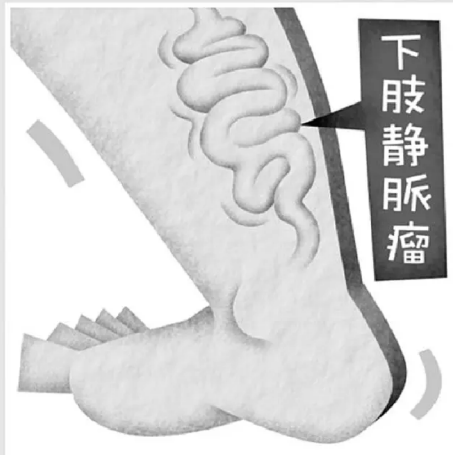
従来のレーザーよりも低侵襲な グルーによる下肢静脈瘤治療

下肢静脈瘤は、足の静脈の逆流防止弁が正常に機能しなくなり、様々な症状が出る病気だ。軽症では医療用弾性ストッキングで経過を診るが、静脈瘤がある場合は傷が小さく、日帰り可能なレーザー治療が2014年から保険承認されたが血栓を生じるリスクがある。欧米で普及しているのが、接着剤で血管内を閉塞する新治療だ。より低侵襲な治療として注目されている。



榎原直樹 血管外科クリニック 東京

足の静脈は、血液を心臓に戻す役割を担っており、重力に負けて血液が逆流しないよう、血管内に「ハ」の字型の逆流防止弁がついている。下肢静脈瘤は、何らかの原因で逆流防止弁が壊れ、血液が逆



下肢静脈瘤

症状が軽い場合は、医療用弾性ストッキングをはく「圧迫療法」や薬剤を注射する「硬化療法」などの対症療法を行なう。静脈瘤ができた場合は、血管内で行なうレーザー治療が2014年から保険承認されている。

「レーザー治療は、血管内にカテーテルを挿入して行なうもので、従来実施されていた全身麻酔を用いて、静脈を引き抜くストリッピング治療に比べ、はるかに低侵襲な治療です。傷口は小さく、日帰りも可能です」

レーザー治療は、血管内に熱をかけるため、血液が沸騰状態になるので、血栓ができやすくなる。このため、術後1か月程度は医療用弾性スト

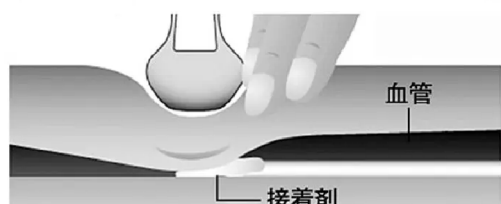
ッキングを着用しなければならぬ。また治療時間は、6分半程度と短い。血管内を焼くため、術後に皮下出血や痛みがあるので、鎮痛剤が不可欠だ。

こうしたレーザー治療のデメリットを補う治療法として欧米で導入が進んでいるのが、医療用接着剤（グルー）を用いた血管を閉塞する「スーパードール治療（日本での名称未定）」だ。医療用接着剤は、日本では1963年に出血部の血管吻合（止血剤）として保険承認されている。イギリスでは、2011年に血管内使用にあたり、安全性と有効性が確認され、2015年にガイドラインに収められた。

治療は足の付け根に近い部分の静脈に針を刺し、超音波画像を確認しながら、カテーテルを挿入して接着剤を放出し、上から圧をかけて血管を閉塞する。麻酔は針を刺す部分のみであり、熱を一切かけないので、血栓のリスクを回避できる。

「私はアメリカで研修を受け、昨年6月から治療を開始。現在、約100症例に実施しています。この治療は、グルーの性質を熟知することが最大のポイントです。接着剤はマインスイオンに触れると、重合（ごうごう）といって一気に固まってしまう。必要ないところまで固まってはまずいので、私は放射状に接着剤が出るようにデバイスを改良しました。また固まる速度をコントロールするため、ある物質を混入するなど改良を重ね、治療効果を上げています」（榎原医師）

下肢静脈瘤グルー治療



足の静脈に接着剤を流しこみ、外から圧迫して血管を接着させて閉塞する

イラスト/いかわやすとし